

# Latina

ラティーナ ラテン世界の音楽情報誌

MUSICA PARA EL FUTURO

昭和40年3月30日第三種郵便物認可

平成元年9月1日発行(毎月1回1日発行)通巻427号

来日インタビュー：ルベーン・ブレイズ〜フンド・チ・キンタル

1989 9 SEPTIEMBRE



EG:far Andreato

# I N D I C E

表紙アーティスト フンド・チ・キンタル

表紙イラスト Elifas Andreato

ルベン・ブレイズ来日インタビュー 原 昭. 写真:IRAIDA ICAZA, 鈴木敏也	4
ミナスからやって来る伝説の怪人!?ウアクチ 文:ケヘル木村	8
フンド・チ・キンタルと聞かれたバゴーチの扉 文:佐藤由美, 写真:岡部 好	12
アナ・ヘレンとビクトル・マヌエル, スペインの音楽-映画を語る 高場将美	16
オスバルド・ブグリエーセの軌跡<6>	
ステントール-フィリップス中期の録音を聴く 文:斎藤 充正	20
18年目にして新女房を迎えたアジムス, 今後の可能性 上田 力, 写真:米田泰久	24
セゴビア・コレクションを聴く<3> 文:坂藏信也	26
タンゴ・アーティスト列伝<その4> アグスティン・マガルティ 文:高場将美	28

# LATINA

No.427 SEPTIEMBRE 1989

## VIA AEREA

ARGENTINA (Keizo Kaji) BRASIL (Hitoshi Miyazawa/ Marco Aurélio Luz de Mello) BOLIVIA (Takaatsu Kinoshita) CUBA (Revista BOHEMIA) MEXICO (Raul Cervantes Ayala) NEW YORK (Kazuo Iwami) PERU (Mario Ozaki) REGGAE-AFRICA (Riichi Fujikawa) VENEZUELA (Jun Ishibashi)	31
---	----

ESPACIO DISK	37
--------------	----

イヴァンよ, 私達の慢性消化不良を治してくれ 文:国安真奈, 写真:松村麻理子	40
ジブシー・キングスのしたたかなショーマン・スピリット 中原 仁	44
アンデス「雲との紀行」<25> "ジャガー" 写真・文:高野 潤	46
西アフリカからの"音風"が問いかけたもの	
スーパー・ジャモノー アッケンデンゲ 文:神波京平, 板垣真理子	48
ハラクアイのアルパ音楽に活力蘇る アルパ界と来日するハビ&	
グルーボ・カンターレスの魅力 レポート・写真:ルシア塩美	52

## INFORMACION

concert live spot radio news books movie art etc.	55
ナイジェリアの魅惑的世界を目と耳で体験する 文:森田純一	63
EVENTO フレイヴ・コンボ-ルベン・ブレイズ-イヴァン・リンス-ダンスホール・ フロム・NY&ジャマイカ-タンゴフェスティバル'89 etc.	65
"亡命者"としての音楽 スサン・デイヒム&リチャード・ホロウィッツ 竹田賢一	68
フォルクローレの旅 52 キューバ(その9) 浜田滋郎	71
AV FORUM	74

ディスコ・ガイド 国内盤 輸入盤	76
オビニオン 愛好会ニュース	87
編集後記	90



Grupo Fundo de Quintal

ラティナー 1989年9月号(通巻427号)  
平成元年8月20日印刷 平成元年9月1日発行  
定価460円(送料70円)  
発行●(有)中南学音楽 発行人●中西義郎  
編集人●本田善治  
〒150 東京都渋谷区恵比寿1-13-6 電話●(03)446-1225  
印刷・製本●城南クラビヤ(株)

# バリオの空地から出たユニヴァーサルな視野をもつスーパー・スター ルベン・ブレイズ来日インタビュー

インタビュー・原 昭／写真・イライダ・イカーザ<sup>(\*)</sup>、鈴木敏也<sup>(\*\*)</sup>  
entrevista por AKIRA HARA / fotos por IRAIDA ICAZA, TOSHIYA SUZUKI

現在のサルサ界において最も八面六臂な活動をする男ルベン・ブレイズが、とうとう日本にやって来た。何せ2年前に一度は来日公演が発表されながら結局は中止になってしまっていただけに、その感慨はひとしおだ。しかも今回のツアーではアルバム『アンテセデ

ンテ』で久々に復活したトロンボーン・アンサンブルも加えて、ルベンのラティーンとしてのアイデンティティがしっかりと打出されていたからなおさらだ。実際、今回の日本公演は、僕が一昨年シカゴで観たショーを遙かに上回るものであった。

——日本公演の具合はどう？  
「とてもいいね、思ったより遙かにいいよ。実際、日本に来ることはとても不安だったんだ。状況が分からなかったから、何が起るか予測できなかったからね。でもみんな好意的に迎えてくれるし、とても感受性が豊かだ。」

そして何よりも驚いたのは、この種のアフロ・キューバン音楽についてよく知ってることだね。おかげで自分達の家にいるような気分でもっとも気持ちよくコンサートをやってるよ」  
——今回、レコードだけでなくステージでもトロンボーンを加えたきっかけは？ 5年ぶ





# RUBEN BLADES

りでしょ?

「それにはたくさん理由があるな。84年以來初めてトロンボーンを加えたのにはね。逆に何でこれまでトロンボーン抜きでやってきたかという、まず一つにはウィリー・コーンと別れてから新しいグループによる新しいサウンドを開発したいと思ったからさ。そしてもう一つは、ウィリーと創り出した音楽を続けることも大切だけど、でも反面ライバル意識を持って競い合いたいとも考えたからなんだ。そうなるとうー・セクションを使ったフォーメーションじゃ単なる繰返しで面白くない。それでだね。だから今回トロンボーンを入れたのは一つの実験だし、その裏にはこれまで創り上げてきたシンセイサイザーによるサウンドがあるって事なのさ。まあ、これから先もギターを加えたりしてヴァラエティのあるものにしていきたいと思ってるよ」

でもトロンボーンが加わった時にはドラムスがいなくなるし、逆にドラムスがいる時はトロンボーンがないって具合に、ストリートなサルサとクロスオーバーしたサウンドがはつきりと分かれてるでしょ?

「基本的には『アンテセデンテ』の時にはできる限りアフロ・キューバンに近づけたかったんで、まず第一に連続するリズムを念頭においていたせいだね。モチ論、これまでだってウィリー・コーン時代のものをある程度受け継ぎながら、ただほんの少しフォームを変えてやっていただけだね。でも徐々にアフロ・キューバ的な趣向が面白いと思ったんだ。それで『アンテセデンテ』をレコーディングする時に、ここ数年やってるものと分けた方がいいかと考えたのさ」

「じゃあどうしてドラムスが抜けた方がいいと思ったの?」

「アフロ・キューバンの持っている『ビュア』なものというか、この音楽の持っている音そのものを大切にしたいと思ったからさ。ドラムスはパーカッションと違うだろう? アフロ・キューバン音楽はその違いを知ってるし、だからこそこれまで分けてやってきてるんだ。それでだね」

「それに伴ってグループ名も、セイス・デル・ソラールから、ゾン・デル・ソラールに変わったよ」

「最初グループがスタートした時には、小さな編成でやりたいと考えていたんだ。そのほうが仕事もしやすいからね。特にツアーに出る時なんか楽だろ。それにある程度実験的なこともやりたいって気持ちもあったからね。でも『エセナス』からロビー・アミン(ドラムス)が加わってセイス(6人)がシエテ(7人)になってしまったし、『アンテセデンテ』からはトロンボーンが入って9人になってしまった。いや、私自身を含めると10人だ。それで、ゾン・デル・ソラールにしたのさ。ゾン・デル・ソラール(三人称複数)のSON(彼らはソラール出身の人間たち)。ゾモス・デル・ソラール(一人称複数)のSOMOS(我々はソラール出身の人間たち)ってわけだ。この『ソラール』というのは



よつとした言葉遊びで、ラテンアメリカ、カリブ、パナマ、キューバ……いや南アメリカでもそうだと思うけど、この言葉は公共の土地、ちよつとした空を意味するんだ。ここには夕暮れ時ともなればいろいろな人間が集まってくる。隅々には洗濯物が干してあり、人々は恋をし歌をうたい、喧嘩もあって……といった具合にバリオの人生が詰まっているのさ。つまり我々はそんな『ソラール』から出てきた人間なんだって意味合いを込めてるんだ」

「いや、実はキューバ音楽の『ゾン』に引っかけたんじゃないかと思ってたんだ。何せ久しぶりにストリートなラテンをやっていたからね」

「うんうん、ゾンはキューバ音楽の原点だしもともとはスペイン人が持込んだものだね。確かにそうだった原点の音を含みたいという意味は多少あったのは事実だな」

「それで思うんだけど、去年は『ナツシグ・バット・ザ・トゥルース』という英語のロック・アルバムと、スペイン語によるストリートなサルサ・アルバム『アンテセデンテ』と両極端な作品を発表したでしょ。これまではその間をいくようなスタイルを取っていたのに。それはどうしてなの?」

「ノー、『ナツシグ……』は私にとって非常に重要な作品なんだ。社会的視点から言っても訴えるものがたくさん含まれているしね。また『アンテセデンテ』はそのタイトルからも分かるように、いろいろなアーティスト達の過去に模倣した、つまり原点からものを見つめた内容となっているんだ。でもロックもサルサと同じように街の中で生まれてきた音楽だろ? 北米ならず世界的に人気のある音楽とて言ってもね。確かに英語でアルバムを作るのはとても難しかったよ。何しろ違う言葉で詞を考えたい、しかも初めての人間達も仕事をしなきゃならなかったからね。それだけに困難も多かった。で、今回、完全に自分の土地と密接に繋がった『アンテセデンテ』

と全く別のアメリカ的な『ナツシグ……』とにあえて分けたのは、スリーブのように、2つの音楽をゴチャ混ぜにしたものを作りたくなかったからなんだ。でも英語によるアルバム作りは必要なことだとも思ってるよ」

「じゃあ英語で歌う必要性って?」

「まず全く違うフォーム、全く違う音楽を使うってのは、私にとって一つの挑戦なんだ。おかげで新たな分野を開拓するという刺激的な気持ちが生じたんだ。そしてもう一つにはこの英語のアルバムを作ったことによって、ロックのミュージシャンとも知合いになれる機会が増えるようになったって事だ。スペイン語を話さない新鮮な人々と接する機会を得たんだ。またこれ以外にも、この仕事を通して一つの場所にとどまらず常に別の可能性が自分にはあるんだって示せたことも大きいことだよ。確かにこの作業は難題だらけだったけど、経験としては実に有意義だったと思ってるよ。実際、エルヴィス・コストロ、ルー・リード、ボブ・ディラン、ステイキングとは、このアルバムがなければ一緒に仕事をすることはなかったんだから。それとサルサ界でロックのアルバムを作った最初の人間になれたってことにも満足してるよ。何しろこういう可能性があるってことを示せたんだから」

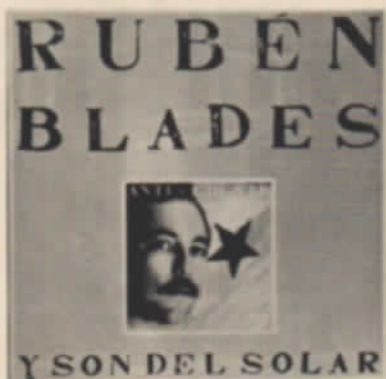
「その難しさで言えば『サムエベテ』の英語版には、さあ、踊ろうぜ。みたいなムードが一杯だけど、『ナツシグ……』は社会的なテーマを扱った曲ばかりが収められているでしょ。その違いが難しさをよく表わしているように思っただけだ」

「『ナツシグ……』を作る上において、『コマール』な意図は全くなかったんだ。もし売れることを考えるなら、もっと別のアーティストと共演すべきだったと思うよ。何しろルー・リードやエルヴィス・コストロといった人達は、ビッグ・セールスを目指したアルバム作りをしたことがないからね。このアルバムで私がやりたかったのは、ロックやポップのフ





NOTHING BUT THE TRUTH



ANTECEDENTE

ホームを取りながらも社会的な問題に背を向けず、いやそれどころか真正面から向き合った音楽を作ることだったんだ。ある一つの視点から社会を見ることだった内容だから、5年、10年とたつてもなお新鮮であるに違いないと思ってるよ。ほんの半年しか聴かれないような、持続性のないものにはしたくなかったんだ。モテ論、英語の歌詞も、音段スペイン語で考え、訴えようとしていることと全く同じ内容さ。ファッション性はなく、この地球がこの世界がある限り決して変わることのない永遠のテーマが収められていると思ってるよ。ともかく「ナッシング…」は歌詞が互いに関連し合い、それぞれがそれぞれに混ざり合うものを持っていくんだ。その面では英語でうまく関連させていくことは、命題として特に難しかったな。複雑だったからね、全てが」

— それにしてもヘミランダ・シンドロームのように英語のアルバムでありながら、英語圏の人よりもむしろラティノに向けた曲が収められているのには驚いたな。

「あの曲では英語で歌いながらもブラジルのパーカッションをフィーチャーすることによって、ユニヴァーサルなアイデアを強調したかったんだ。ラテン社会というのは人間の移動、イミグレーションが行なわれたからといって何も解決しないんだよ。だから何らコントロールされることなしにラテン社会が内側に抱えている問題を引出したいと思っただけだ。」

「ああやってみたんだ」

ところで、個人がルベン・ブレイズとじっくり話をするのはこれで3度目。でも今回はスペイン語で話をしてほしいが、これまでとは打って変わって打解けたりラックスしたムードを漂わせている。そのせいかこれまで持っていた近寄りたくない雰囲気もすっかりなくなり、これまでにない親近感を覚えてしまった。だがそれも一度祖国パナマの政治の話になった途端、一転した。

— ところで貴方の社会意識というのはどこから生まれたんだろうか。もともと弁護士だったからこの間も話してたけど、果たしてそれだけなのかな？

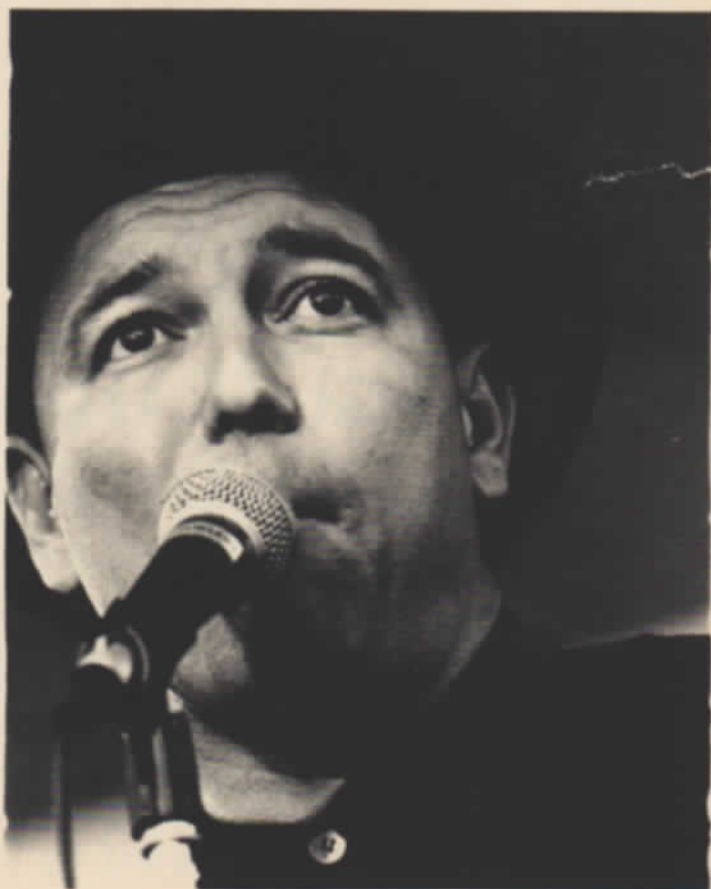
「弁護士になったのは社会に関心があったからで、弁護士になったから社会に関心を抱いたわけではないんだ。もともと、自分の周りで起こっていることにいつも関心があるんだよ。だから将来的には政治へのキャリアに関しても興味があるし、また社会を知ることが私自身の存在意義でもあるし条件でもあると心得てるよ。」

— 実は貴方がパナマで生まれ育ったことに起因してのではないかと思ってるんだ。あの国はラテンアメリカ諸国に共通する問題を抱えているし、しかもパナマ運河のおかげで合衆国の存在が、モロに見えてしまってるで

「確かにそうかもしれない。でも私の基本的な考えは、ラテンアメリカ、特にパナマが直面している問題についてだ。ラテンアメリカの中の一国の社会に入れ込んで訴えかけてゆくと思ったのは、政界の賄賂を始めとする腐敗や崩壊がどうしても気になるからなんだ。つまり国民を正しい方向に導いてゆく指導者が、全く欠乏してしまった社会への心配なさ。政治というのはそもそも少数のエゴイスト連のためにあるわけではないはずだ。だから私は歌を通じて政治、社会の問題に直面し闘いを挑んでるんだ。そのことによつて国民にある程度は選択の余地があるんだってことを知ってもらえれば、と思ってるよ。」

— 特に「アンテセデnte」を聴いているとパナマの政治への関心がまた一段と深まるように思うんだけど。

「政治は私個人の日々の生活にも大変な影響を及ぼす事柄だけに、とても強い関心を持つ



てるよ。長い人生の中で政治に対して全く何もせずに過すか、それとも何らかの形で手をくたすか、人間には両方があると思うんだ。それで言えば私は教育も受け、今なお勉強し続けている身だから、何かをしたいという方に属する人間だと思ってるよ。どんなカテゴリーでだかはまだ分からないけれど、将来的には、国民の一人として是非政治改革に加わりたいという希望は持っている。しかも政治は経済にまで及んでいるだけに、国民一人一人の生活にも大きな影響をもたらしているんだ。だから政治に対してただ不平不満を並べたのではなく、何か変えてやろう、改革してやろうと考える人間でもあると思ってるよ。」

— ナル程ね。で、ちょっと話はそれるけど先頃のパナマの選挙についてはどう思ってるのかな。日本では見えにくいところが多過ぎて、何が何だかよく分からないんだ。

「この間の選挙でパナマは新たな局面を迎えたんだ。でもパナマの問題と一口に言っても



実に難しいし、世界で考えられているより遙かに複雑なんだよ。で、これは私個人の意見だけれども、最大の問題はパナマという国を方向づける人物の不在だ。パナマの将来的な計画に対する様々なアイデアを決める指導的な人物がいなし、いやそれどころかもっとひどいことにそのアイデアすらないんだ。確かに国内には様々な訴えの声や変化を求める声が上がってはいるものの、それは今の現状では全く取上げられないし、それ以上悪いことに、表現することさえもできないでいる。例えばノリエガについても、ノリエガ派、反ノリエガ派にパナマ社会は二極化してしまっているんだ。しかもその間に政治そのものに全く興味を持っていない人々がいて、その人達は全く何も信ずることができずに生きていくことだけで精一杯という状態なんだ。さっきパナマには将来的な計画がないと述べたけれど、この先失業率はどうなっていくのか、新しい産業は開拓できるのか、環境問題、農民問題……等課題はあまりにも多い。でも現在の状態では全く何もできないんだ。ともかく方向付けを失ったパナマというのが一番の問題だと思う。

そしてこうした状況になったのは合衆国のせいだと一般的には言われているけれど、決してそれだけではないはずだ。それよりもこのあまりにも複雑に入り組んだ社会的な問題が、そもそもの根本悪、治癒すべき根本的な問題だ。一体パナマとは何なのか、パナマ人とは何なのか、パナマはこの先どうなっていくのか……といった基本的な事柄を、国民一人一人が考えていかなければならない。はっきり言って簡単な解決策など何一つとしてあり得ないし、モチ論、ノリエガだけの問題でもない。たとえノリエガが明日国を出て行ったとしてもなくなる問題では決まてないんだ。それよりも大切なのは、パナマ自身がこの先パナマをどういう方向へ持っていかをどう考えるかにかかっているんだ。

——じゃあその中で貴方自身はどう関わっていかうと思ってるのかな？

「これは私自身、確信があるから言えるけど、現在、パナマでは様々な改革をしようとする準備が着々と進められているんだ。モチ論、私自身にしても改革をしたいという欲求もある。今のパナマに、モラルを持って社会改革をしてゆこうとする人物が存在しているのは事実だし、私はその社会改革のための選択の余地を自国に作りたいと思っているんだ。現在の私には政界とのコネクションは全くないし、軍との繋がりも全くない。逆に言えばそれだけに賄賂といった壊滅的な状況に私自身が巻き込まれる可能性が全くないということでもあるんだ。確かにお金を持っていないわけじゃない。でもそれは外国で働いて稼いだ外国にあるお金だけだし、私自身はともかく質素な生活を送っているんだ。だから金に関する身辺の問題は何一つとしてないと言える。しかも私は若い人達によく知られているし、さらには法律家であることも知られている。それだけにこれから先、特に若い人達やパナマの現状に疲れて何とかしなければならぬと考えている人々と一緒に、一つ一つの問題を分析し計画し、そしてさらにはあらゆる分野から人材を招いて、現在のパナマが抱えている問題を解決する方法がとれるに違いないと思ってるんだ。その可能性は高いと思ってるよ。そしてこれは私がやっていけるというだけじゃなくて、一人のパナマ人としてパナマ社会に貢献するための義務でもあるんだ。」

※ところで今後のルベン・ブレイズの予定は、日本公演の後は8月いっぱいはいはカリフォルニアからブルトリコまでの全米ツアー。また9月17日には、ニューヨークのマジソン・スクエア・ガーデンで開かれる恒例のサルサ・フェスティバルに出演することが決まっている。一方、すっかりお馴染みとなった映画出演は「トゥー・ジェイクス」とジャック・ニコルソンが監督・主演する「チャイナ・タウン2」が、現在撮影中であるという。

(7月28日都内のホテルで、通訳「伊吹朋子」取材協力「NHK衛星放送BEAT89」)